

明治十勝工場（芽室）も一部の電力を自家発電で賄い、節電に協力する。ただ工場全体を動かす発電能力はなく、停電時は操業を停止した。森永乳業傘下の浦幌乳業（浦幌）は、11日時点で生乳受け入れ量がほぼ停電前の水準に戻ったが、自家発電の設備はなかった。

停電で乳牛の配合飼料の供給も滞った。ドリームヒル（上士幌）は通常使っているものが届かなくなり、別の飼料に切り替えてしのいだが、乳量が落ちた。

酪農家にとっても電源の整備は喫緊の課題だ。帯広市内のある酪農家は、よつ葉が生乳を受け入れ続けたため廃棄はなかったが、自家発電装置が不安定で思い通りに搾乳できず、複数の牛が乳房炎を発症した。

管内酪農業は人手不足もあって機械化が進んでおり、電力への依存度もその分高まっている。例えば搾乳ロボットはほぼ24時間動かす必要があり、通常は朝夕の2回動かす搾乳機に比べて使用電力が多くなる。

十勝地区農業協同組合長会の有塚利宣会長は「発電設備の導入はコストがかさむが、今回の停電で牛に被害が出ず、元が取れたと話す生産者もいる。規模が拡大する中、自家発電は必須になってきた」と話す。

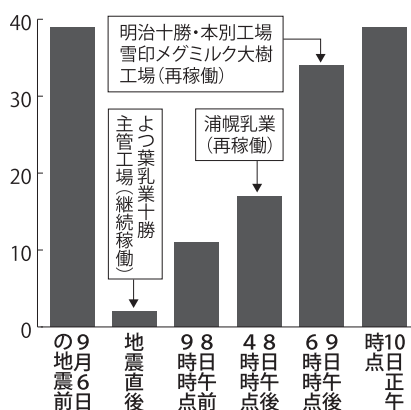
非常時の減産を最小限にとどめるためにも、酪農業に関わる関係者全体が協調し、危機管理体制を見直す必要があるようだ。

よつ葉のみ先行 停電対応 乳業各社へ募る不満 廃棄補填求める声も 酪農家

2018年10月11日

管内の酪農家が、胆振東部地震を受けた乳業メーカーの対応に不満を募らせている。よつ葉乳業十勝主管工場（音更）が、地震後の停電時も自家発電機を使って生乳の受け入れを続けたのに対し、残りの主要工場は操業を停止。生乳は廃棄された。先月下旬、道農業界は発電機の整備を要請したが動きは鈍い。水面下では、生乳廃棄に伴う損失を負担するよう乳業メーカーに求める動きもある。

◆地震後の道内乳業工場の稼働工場数
※1日処理量が2t以上の工場を対象に農林水産省調べ



「メーカーとして供給責任を果たさないのか」。9日、帯広市内のとかち館で開かれた「十勝酪農畜産対策協議会」。集まった酪農関係者から乳業メーカーへの批判が相次いだ。

「よつ葉の工場は停電中も動

いていたことを、他の乳業メーカーは教訓にしてみたい」。同協議会の坂井正喜会長（J A大樹町組合長）は、管内酪農家の心情をこう代弁する。

管内で生産する生乳の大半は、よつ葉のほか明治十勝工場（芽室）と本別工場（本別）、雪印メグミルク大樹工場（大樹）、森永乳業傘下の十勝浦幌森永乳業（浦幌）が集荷する。ただ、よつ葉以外の3社は発電機を備えていないか、発電能力が足りないため停電で生乳の受け入れを停止した。

生乳の出荷先はホクレンが割り振りし、酪農家は工場を選べない。停電中も発電機を使って搾乳を続けた酪農家は多かったが、出荷先がよつ葉かよつ葉以外かで、生乳廃棄などの損失額に大きな違いが出た。

電力復旧後の対応も、よつ葉と残り3社で差は大きい。よつ葉はいち早く、発電機がなかった根釧工場（釧路市）など道内2工場にも導入すると表明。これに対し、残り3社は「工場の稼働を満たすだけのバックアップ電源の導入を検討中」（雪印メグミルク）などとするが、導入を公式に発表したわけではない。

J A道中央会などは先月、各社に自家発電設備の整備を指導するよう政府・自民党に要請。これとは別に、道農協酪農・畜産対策本部委員会（道酪畜対）が乳業メーカーの業界団体に「万全な生乳受け入れ体制の構築」を促した。「今後も粘り強く要求していく」と中央会の幹部は話す。

生乳廃棄の責任を乳業メーカーに求める声もある。工場の受け入れ停止で集出荷が不能となった生乳に対し、ホクレンが被害額の半分以上を補償する方向で検討中だ。ただ酪農法人ドリームヒル（上士幌）の小椋幸男代表は「生産者団体のホクレンが負担するのは筋違いではないか」と話す。

明治、雪印、森永の3社は酪農支援のため合計1億5000万円を道に寄付するが、これでは不十分とみる向きもある。あるJ A首脳は「ホクレンの支援を呼び水に、乳業メーカーからも廃棄の補填（ほてん）を引き出せないか各方面に働き掛ける」と明かす。

酪農家と乳業メーカーは、牛乳・乳製品の供給責任を負う運命共同体だ。共存共栄に向け、両者がどう歩み寄るかが問われる。